

コミュニティを考える上で参考になる最近読んだ本

(なお、本のタイトルのあとに書いてある日に、村夏至のブログに、その書名のタイトルで読書メモを書いているので参考にいただければ)

・『コミュニティを問いなおす』 2010年4月6日、8日

(広井良典著、ちくま新書、2009年)

この本の中で、著者はとりあえずの定義として次のように位置づけています。

「コミュニティ=人間が、それに対して何らかの帰属意識を持ち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支え合い)の意識が働いているような集団」

日本におけるコミュニティを考える上で参考になる生物学者リチャード・ドーキンスさん比喩。

「比較的恵まれた自然環境において、稲作を中心とする、小規模の、かつきめ細やかな集団管理や共同作業、そして同調的行動が求められる集団で形成されるような人々の関係性のあり方」 “稲作の遺伝子”

著者が「第6章 ケアとしての科学」の最初に大づかみに指摘している点は見逃せない。

- (1) これからの科学あるいは知的探求において、「コミュニティ」という主題が中核的な重要性をもつようになると考えられること
- (2) それは、これまでの(1800年代の科学革命以降の)「近代科学」のあり方そのものを大きく問いなおす意味を持つであろうこと
- (3) そうした探求は、特に日本では顕著ないわゆる“文系と理系”、あるいは人文科学、社会科学、自然科学といった領域を越えるような あるいはそれらの接点となるような 性格をもつはずであること

・『社会とは何か システムからプロセスへ』 2010年3月24日

(竹沢尚一郎著、中公新書、2010年)

著者は、“はじめに”で、次のように書いています。

(前略)社会的弱者であれ、文化的に異質な存在であれ、さまざまな人間が共存できる包摂型の社会を実現することが必要なのではないだろうか。

しかし、ここに問題がある。人びとを包摂しうる単位は何か、という問題である。それは、社会福祉政策の実施主体としての国家なのか。それとも、歴史を通じて生活の基盤であったコミュニティなのか。あるいは、新しい経済システム対応可能なNPOなどの市民団体なのか。はたまた、戦後の日本社会がそうであったように、企業や組合の役割を再強化することが必要なのか。

それは社会である。多様な人間を、多様なままに包摂できるのは社会である。そのようなものとして社会を構築ないし再構築しなくてはならない。そうするためには、なによりもまず社会の概念を鍛えなおさなくては



ならない。(後略)

そして、社会という概念が「発明」された 1800 年代からさかのぼって、社会がどうふうふうに考えられ研究されてきたかをわかりやすく概観できるようになっています。

取り上げ方に評価が分かれそうですが、概論に終わらずに、終わりの 2 章で、具体例として「移民問題に取り組むフランス」「水俣病に対峙した『サークル村』」を取り上げています。副題にあるように、これからの社会やコミュニティを考えていく上で、システムではなくてプロセスなのだ、ということは大切だと思います。

- ・『子どもの社会力』 2008 年 7 月 1 日 (A 4 版 4 ページの PDF メモあり)

(門脇厚司著、岩波新書、1999 年)

- ・『社会力を育てる 新しい「学び」の構想』 2010 年 6 月 3 日

(門脇厚司著、岩波新書、2010 年)

『子どもの社会力』の「はじめに」の中で、

「いまの子どもたちにみられる変化とは、煎じ詰めれば、他人への関心と愛着と信頼感をなくしていることであり、自分がふだん生活している世界がどんなところであるかを自分の体で実感できなくなっていることではないか」

と、門脇さんは、語り始め、今の子どもたちに大切なのは、既存の社会に個人として適応する側面に重きを置いた「社会性」ではなくて、社会的動物ないし社会的存在たるにふさわしい人間の資質能力である「社会力」であるとして、その現状分析から、どういう方向性が求められているかなどについて丁寧に解説してくれています。

続編になる『社会力を育てる』でも一貫して、大人がしなければならぬのは、生まれた直後から、可能な限り子どもとの相互行為に努め、「社会を構成する誰もが、一人ひとりの能力の多寡にかかわらず、お互いに自分の能力を他の人たちのために役立て活用することで成果をあげ、成果を分かち合うことで互いに感謝し感謝されることを喜びにして生きていける社会」=「互恵的協働社会」を実現することによってのみ、現代の山積する課題を解決していけると提言しています。

- ・『ミラーニューロンの発見』 2010 年 2 月 11 日 (4 記事分あり)

(マルコ・イアコポーニ著、塩原通緒訳、ハヤカワ新書 juice、2009 年、原書は 2008 年)

「生物学における DNA の発見に匹敵する」と称される脳科学におけるミラーニューロンの発見とその驚くべき機能・役割を、第一線の研究者が、一般の人向けにわかりやすく書いてくれている本。

その研究は、これからの社会やコミュニティを考えていく上で、多くの示唆を与えてくれます。最後の部分を抜粋します。

私たちは現在、神経科学からの発見が、私たちの住む社会や私たち自身についての理解にとつともなく深い影響と変化を及ぼせる地点に来ていると思う。いまこそこの選択肢を真剣に考慮すべきである。人間の社会性の根本にある強力な神経生物学的メカニズムを理解することは、どうやて暴力行為を減らし、共感を育て、自らの文化を保持したまま別の文化に寛容となるかを決定するのに、とても貴重な助けとなる、人間は別の人間と深くつながりあうように進化してきた。この事実気づけば、私たちはさらに密接になれるし、また、そうしなくてはならないのである。

地域で、地縁でない新しいコミュニティを求めて（私がしていることをより具体的に）

ちょっと要領を得ず、何を書いているのだからという感じですが、とりあえず。

1 私ですでに行っていたこと

10年くらい前から、冬の時期の焚き火遊びや、公園で五感を使った遊びの呼びかけチラシを地元の小学校を通じて配って、自由に参加できる行事を行っていた。

2 退職者を中心とする市民活動団体の発足

地域を流れる川で一人の高齢者が草刈りやごみ拾いをはじめ、それに賛同した人たちが集まって数年前に団体を作り、川の草刈りなどをメインにしながら、今では、県道の路肩の草刈りや地元の史跡の大きくなりすぎた木の伐採や、自治会や個人の法面など少し手間のかかる草刈りを受託したりしている。

その根っこには、自分たちが子どもの頃にはもっと川や自然の中で遊んでいた経験があり、そういう自然を取り戻して、子どもたちに遊んでもらいたいという思いがあった。



3 コラボのはじまり

その団体（今は私もメンバーになっています）は、子どもたちと何かしたいと思いながら、子どもたちに呼びかけるノウハウがなかったので、協力関係を持ち、川のごみ拾いや焚き火遊び、休耕地を借りての焚き火に使うサツマイモ作りなどを行うようになった。

4 そのどこがコミュニティなのか（任意に集まることから生まれる何か）

地域の人同士が何気に知り合うことは大切なことだと思います。その一つとして、見守り隊などといった、子どもたちの登下校を見守る高齢者の活動などがあるが、そういうのは少し一方的なような気がする。

半強制的な感じのするものではなく、あくまで任意で、やりたい人が集まることによって、一緒に時間を過ごす。そこから、自然に知り合いになったりすることはできないのか、という問題意識が私の中にあった。

実際に行ってみて、例えば、子どもたちの焚き火遊びの焼き芋用のサツマイモを作らせて欲しい、という趣旨を説明して公募し、タダで利用させてもらっている休耕地を5年前に、はじめみんなで草取りや耕作をしたときの、共同作業の爽快感は忘れられません。そういうのが、コミュニティ意識の原点なのかなあと感じたりするのです。



広告（村夏至のブログの紹介）

ブログ名：MI ジャーナル

「はたけと芸術を楽しみつつ、仮説を立てながらいろんな人と協働して問題解決を図り、子どもとともによりよい社会を目指したい、そういった人のヒントになりたい」という気持ちでやっています。

アドレス：<http://blog.canpan.info/nougeiraku/>